

# ヴェーユ身体論〔補 I〕

## Sur le traite du physique de Weil〔I〕

村上吉男

Yoshio Murakami

〈わたし〉と一体たらしめる〈真理〉を明かす際、筆者はどうしても以下の文章を取り上げておかざるを得なくなる。これもまたヴェーユについて「明確に答え得なかった諸点を証すのに」さらに不可欠な引用文になると察知されるからである。

La nature humaine est ainsi agencée qu'un désir de l'âme, tant qu'il n'a pas passé à travers la chair au moyen d'actions, de mouvements, d'attitudes qui lui correspondent naturellement, n'a pas de réalité dans l'âme. Il n'y est que comme un fantôme. Il n'agit pas sur elle. ...

Le bien que nous n'avons pas en nous, nous ne pouvons pas, quelque effort de volonté que nous fassions, nous le procurer. Nous ne pouvons que le recevoir.

Nous le recevons infailliblement, à une seule condition. La condition est le désir. Mais non pas le désir d'un bien partiel.

Seul le désir dirigé directement sur le bien pur, parfait, total, absolu, peut mettre dans l'âme un peu plus de bien qu'il n'y en avait avant. Quand une âme se trouve dans cet état de désir, son progrès est proportionnel à l'intensité du désir et au temps.

Mais seuls les désirs réels agissent. Le désir de bien absolu, lui aussi, est efficace pour autant et seulement pour autant qu'il est réel. ...

Une convention relative au bien absolu ne peut être ratifiée que par Dieu. <sup>(1)</sup>

人間の本質というものは、魂の願望が生得的に魂にかかわる行動、運動、挙動（の仲立ち）によって身体を経由させられないかぎり、魂に願望を取り込めないように組み立てられている。そうならない願望は魂に幻想のごとく存するだけである。こうした願望は魂に働きかけない。...

わたしたちはわたしたちのうちにない善を、どんな意志の努力を試みようとして、手に入れることができない。わたしたちは善を受け取るしかできない。

わたしたちは唯一の条件を課して、善を必ず受け取る（ことができる）。その条件とは願望である。しかし不完全な善への願望ではない。

純粋な、完全な、すべてを統轄する、絶対的な善に真直ぐに向けられた願望のみが、魂にそれ以前にはなかったような善をいくつか生じさせることができる。魂がこうした願望の状態にあるならば、魂は願望の激しさと時間に比例して（魂全体に）広まるにちがいない。

しかしこのような働きかけをするのは現実の願望だけである。絶対的な善への願望もまた、この願望が現実の願望であるかぎり、効果的なのである。...

絶対的な善についての約束ごとは神によってのみ認証される。（括弧内は筆者）

「〈わたし〉と一体たらしめる〈真理〉」は何かと質す途中で取り上げた、上記引用文中にはしかし、〈真理〉の語が書かれていないが、その代わりになるうと思える、〈絶対的な善〉という語が散見される。「〈真理〉」が何かを「明かす際」、筆者はヴェーユをして〈真理〉に〈含め〉させた〈あらゆる種類の善〉の一である〈絶対的な善〉を実際に摺り取らせることが、彼女のみる〈真理〉の語に充当することであって、この〈絶対的な善〉を〈理性（知性）〉の行使で得る〈観念〉により認識されるだけをもって〈真理〉とみなしてならないと断じおきたい。すると上記引用文から読み得る通り、〈絶対的な善〉たる〈真理〉はこの最終段落に記される〈神〉をさすことを措いてほかにあり得なくなろう。つまり一見したごとく、彼女が「あの世界」のことはむろん、〈この世界（現実）〉に対しても不可知論的立場で対処していたために、14歳当時を振り返る引用文にさえ、本来〈真理の王国（あの世界）〉と記す必要がないにもかかわらず、それでも〈真理の王国〉と明記せずにおれなかったは、彼女が14歳の頃を回顧

してはその当時、後日に体験せる〈恩寵〉を授かったり、〈あらゆる形相状の、靈的な善の領域〉に〈入〉ったりできたことを明確にしていない引用文になったとしても、〈真理の王国〉に〈入〉ることを憧れ、その〈真理〉を〈神〉と予知していたことを示唆させるからだ、換言すると彼女が〈望〉むと〈願望〉や〈注意力〉なる諸能力（後述）をもたらした工場体験、宗教体験や農業労働体験を経ては不可知論で対応しよう、自らの知的誠実さは〈この世界〉ではまだしも、「あの世界」ではもはや役に立たないことを知るからだということである。

そこで問わねばならぬは、いかにして〈真理の王国〉の、〈絶対的な善〉である〈真理（神）〉をヴェーユに掴み取らせたかである。彼女はこれを、〈感受性以上に運<sup>②</sup>ばせる際に生じよう〈魂〉の〈感受性〉のほか、〈魂〉の〈望〉む（désirer）と〈願望（désir）や〈注意力（attention）〉においてと主張したし、この〈超越的、靈的な王国（領域）〉にあって、そうした能力の語が適合するといえるか否かはさておき、かかる能力が生まれたは工場体験、宗教体験や農業労働体験であったと繰返してでもいっておかねばならない。なぜか。各体験はみな彼女の〈魂〉をあたかも、ヨブが〈どうか神がわたしを打ち滅ぼすことをよしとし、み手を伸べてわたしを断たれるように〉<sup>③</sup>と、キリストが〈わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになった（のです）か〉<sup>④</sup>と叫んだに等しくさせたと、しかも各体験から、〈真理（神）〉は彼女が〈神を探し求める〉ようにはなく、〈絶対的な〉〈善（神）を（恩寵のごとくに）受け取るしかない〉ようにあったと察知される。

以上を踏まえても、筆者には〈この世界〉とは何か、〈魂〉とは何か、その〈魂〉にあって、〈望〉むと〈願望〉や〈注意力〉なる諸能力とは何か、〈理性（知性）〉をいかに用いねばならぬかなどに対する、筆者なりの結語が欠かせなくなる。このために『靈的自叙伝』と『秘蹟の理論』の各引用文を持ち出したは、前者に上記のような問いが惹起され、後者にその答えが秘められくるかかわりにあると読み得たからである。それにこの問いへの答え（結語）は、ヴェーユのいう〈必然性〉や〈不幸〉を明らかにさせ、そこに立つことで、「まだ明確に答え得なかった諸点を証す」し、筆者に提起できた「認識論」を確実にさせるだけでなく、14歳頃を語り、34歳に記した各引用文を見渡せば、彼女によってこ

ここに書き残された、「静の行動」たる思想や「動の行動」たる「生きた哲学」は終始整合性と一貫性を確保し得たことを明かすであろうと、かつボーヴォワールの思想ともはや相違させるは間違いなからうといえる。ただし筆者はこれまでに分析し説明してきたことの繰返しをできるかぎり避けて、以下に上記した問いに答え（結語し）なければならないと断わっておく。

まず、『秘蹟の理論』の冒頭の文章に注意しよう。それこそ人間にとって〈必然性〉を意味させる。これを含め、たとえばキリスト教にいう神の創造した〈この世界〉に対して、ヴェーユは〈必然性〉と語るだけでなく、〈必然性〉なる〈この世界（現実）〉をもかたちづくらすは「あの世界（真理の王国）」の〈神〉であるとされる。それにキリストが神に〈見捨て〉られたとの叫びにかかわらせていうと、彼女のみる〈神〉はキリストをはじめとした、すべての人間をはむろん、〈この世界〉さえ〈見捨て〉たに等しい〈必然性〉でもって支配していたのだ。しかれどもこうした〈必然性〉なしに、彼女は〈この世界〉と「あの世界」が繋がらないと断じるのみか、これ以外の見方で、いわゆる《不幸》を捉えていないことも確かなのである。〈この世界〉と「あの世界」が繋り（関係）あるとみえるは、例の『靈的自叙伝』に記される〈美、徳（力）〉が明らかにする。要は彼女にあって、「あの世界（神）」が自然やすべての人間の生きる〈この世界〉を〈見捨て〉（放棄して）創造したために、〈この世界〉にかかる〈必然性〉が、〈必然性〉の一たる、〈世界（自然）の美〉や「すべての人間」に課せられる〈徳〉がもたらされるのだ。さらに筆者が〈vertu〉を〈力〉と訳した場合もそうである。つまり〈力〉は〈神〉の〈この世界〉のかの創造による、〈この世界〉の自然や「すべての人間」を襲ってやまない〈必然性〉の一たる証しとなり、いわばその代表が〈不幸〉であって、そこには当然、〈神〉とかかわらせていう〈不幸〉も組み入れられる。ヨブやキリストが叫ぶところにみられる、〈わたしたちはわたしたちの悲惨（不幸）を作るのではない<sup>64</sup>〉がこれだ。〈神（あの世界）〉との繋り（関係）を〈この世界〉の〈必然性〉にみずば、彼女をして、およそ〈この世界〉に〈美、徳（力）〉を見出すといわせるはずがないし、彼女に語られようキリストも、ご自身で〈見捨て〉られたと叫ぶはずもないのだ。

なお、筆者が自然を「しぜん」でなしに「じねん」の謂と捉えては、これと

同意になろう、〈人間の本質 (la nature humaine)〉と記された〈本質〉もヴェーユ (人間) にあって〈必然性〉にかかわるとみることに對し、たとえば、人間の主体性を前面に出さざるを得ないがゆえに、〈実存は本質 (essence) に先き立つ〉といい切るサルトルをここに持ち出しても、各〈本質〉の語の違ひでは比較にならないにせよ、それでも彼の場合、〈本質〉は〈必然性〉に依拠せぬ〈本質〉でしかなくなろうし、彼女の場合、彼の表現を借りていうと、〈本質〉の方が〈実存〉より〈先き立〉たれるにちがいないと付け加えおく。なぜなら彼がいわば「存在論 (実存)」を真先きに質すのとは異なり、彼女は、〈人間の本質〉を〈組み立て〉る〈必然性〉に従わせ作り上げた (と筆者に思われる) 「認識論」でもって、〈真理の王国〉にさえ〈入〉るべく、自らを〈必然性〉たる、その〈本質〉に委ね、〈本質〉を〈神〉に返す「存在 (論)」にさせることを、いわゆる《逆創造 (décréation)》<sup>(6)</sup> (この世界の創造を脱すること) をめがけ得たからである。〈逆創造〉を実現させるにあって (逆創造はこの世界での不幸を受け入れ背負うことにはじまる)、彼女は〈この世界〉での〈不幸〉を受け入れ背負いながら、「あの世界」の〈真理を望んだり、たえず真理に達するための、注意力の努力をな) し得なければ、彼女のみか、誰にとっても〈この世界〉から「あの世界 (真理の王国)」へとの繋り (関係) が見失われ、「あの世界」には〈入〉れなくなるであろう。

次に、すぐさま上記した、『靈的自叙伝』中の〈望〉むや〈注意力〉、あるいは〈願望〉なる諸能力を明らかにしておかねばなるまいが、ここではそのことよりか先きに、ヴェーユが諸能力をいずこで發揮させると語っていたかを確認しておく必要がある。「いずこ」はもとより〈魂〉をさすからして、筆者は「〈魂〉とは何か」を問えるわけである。だが上記作品中には〈魂〉の語が見出し得ぬからして、『秘蹟の理論』の引用文を参照せずにおれなくなる。そこに〈魂の願望〉という語句が記される。〈願望 (désir)〉は『靈的自叙伝』の〈願望〉であるし、〈望〉む (désirer) ともかかわっていなければならぬ。この「能動 (望む)」と「受動 (願望)」の各能力を可能にするのが〈魂〉なのであった。しかも「〈魂〉とは何か」を探るには、『秘蹟の理論』での〈魂〉の語に対する冠詞の使用に留意することが必要になる。それは筆者の、〈魂〉に関する主張がこの冠詞の使用から浮かび上がるからだ。その引用文において、(lui) と (elle)

も「定」冠詞付き〈魂〉の代名詞ゆえに、(l'âme) は5回、「不定」冠詞付き〈魂 (une âme)〉は1回用いられる。掲載分の引用文の中味（後段以降に譲る）に添っていうと、筆者は「定」冠詞付きの〈魂〉をすでに触れた、「〔脳〕全体をさす〈魂〉」<sup>7)</sup>に、「不定」冠詞付きの〈魂〉をすでに触れた、「視床脳」をさす〈魂〉<sup>8)</sup>にみる事ができた。だからなぜ二つの〈魂〉がみられるかも後段以降に譲って分析するにしろ、〈魂〉に二用法があることだけは間違いなからうといわねばならないのである。

そして、両引用文に見出されよう〈魂〉の諸能力のうち、なかでも〈望〉む（能動）と〈願望〉（受動）とは何であるかを、それはたとえば、これらが〈魂〉にいかなる前兆もなく、突然生じてきたのか否かを、さらに〈この世界〉のだけでなしに、「あの世界」の能力になり得るか否かを、しからば〈この世界〉と「あの世界」を繋ぐ（関係させる）能力たり得るか否かをヴェーユに聞いて確かめることを要求する（なおここに〈注意力〉を書き添えずにいたは、〈注意力〉が『靈的自叙伝』の引用文にしか散見しないのみか、筆者をして〈願望〉とほぼ等しい能力のように受け取らせるためである）。〈望〉むと〈願望〉が〈この世界〉と「あの世界」で各生じ、しかも両世界にかかわるかと筆者にいわせるのは、彼女が〈願望〉がそれ自身によって、あらゆる形相状の、靈的な善の領域で効力を有する）が、この〈願望〉はしかし、〈他の領域では効力のないことも確信できる〉と、かつ〈恩寵と願望との関係がみられる〉〈願望〉であると語る、『靈的自叙伝』の引用文に従えば、当然のことなのである。

上記したことは以下の説明で確認（証明）される。一に、「〔脳〕全体をさす」、「定」冠詞付きの〈魂〉とはヴェーユにとって、大方筆者の語った「認識論」での、〈理性（知性）〉の機能を司る〈精神（大脳皮質）〉と、かの〈望〉むと〈願望〉にかかわるとみられる〈魂（視床脳）〉の各部位でもって構成されると、そのうえこの「〔脳〕全体をさす〈魂〉」は、不断は彼女のいう、〈他の領域〉での自然（しぜん）的な〈魂〉として、ときには〈靈的な善の領域〉すなわち〈真理の王国〉に〈入〉って得られる、自然（しぜん）を超えた超自然的な〈魂〉として、いってよければ〈脳（身体）〉に関与せず、あたかもその外にあるう〈魂〉として配置させられるといえる。自然的な〈魂〉の超自然的な〈魂〉への移行は察するに、〈恩寵〉を可能にする〈逆創造〉を完成させることであり、

彼女にいう〈身体〉と自然的な〈魂〉との〈心身合一〉をも超えた、古代中国以来の思想に共通に語られる「天人合一」を実現さすことになる。むしろここでいう「天人合一」とは、彼女（人間）の自然的な〈魂〉が〈真理の王国「天」〉に〈入〉るならば、超自然的な〈魂〉として「天」すなわち〈神〉と〈合一〉するであろうという意味でしかない。するとこのとき、「〈脳〉全体をさす〈魂〉」にあって質されるは、自然的な〈魂〉がいかにして超自然的な〈魂〉になり得たか、要は「〈脳〉全体をさす〈魂〉」のなかでの、〈魂（視床脳）〉の〈精神（大脳皮質）〉への関係はどうであるかであった。すでに触れおいたことでいうと<sup>9)</sup>、〈精神〉の〈思惟する（能動）〉とその〈思惟（受動）〉が何ゆえ〈逃亡〉したのかであった。この原因こそ、筆者にすれば、後段でも明らかにしよう、例の〈身体〉の〈感受性〉をもとに〈魂（視床脳）〉で、デカルトをして〈同一のことがらである〉といわしめる〈望〉む（能動）から〈願望（受動）〉を生じさせる、この感情能力にあったと断じさせ得るのだ。なお筆者が前段にて〈この世界〉や「あの世界」と表現したことは、『霊的自叙伝』によってはそれぞれ、〈他の領域〉や〈霊的な善の領域〉に該当する以外にないのである。

また一に、筆者は〈魂（視床脳）〉の働きをいかに捉えていたかを振り返る必要がある。肝心なのは、それが「〈脳〉全体をさす〈魂〉」のなかで唯一〈身体〉の諸能力と関係する部位であり、かの〈望〉むと、〈願望〉も上記した通り、その部位で〈身体〉のいかなる能力ともかかわらず突如生じくるとはならないということであった（ただし以前に、こうした〈感情〉が〈魂（視床脳）〉だけで産出されるもあると想定したが、筆者に後述して結語させるに、〈感情〉は〈身体〉の諸能力との、わずかな関連もなしに生み出されはしないことにある）。今記した〈身体〉の諸能力とはヴェーユにあって、〈身体〉の〈感じる（ressentir）〉〈能動〉能力とその〈受動〉能力であったし、〈受動〉能力には〈感覚（sensation）〉や〈感受性（sensibilité）〉があると語られていた。〈身体〉の〈感覚〉や〈感受性〉はだから、いずれも「不定」冠詞付きの〈魂（視床脳）〉に伝えられる。この部位への伝達より先に、〈思惟（する）〉機能をみせる〈精神（大脳皮質）〉に伝わるのではなかった。しかも〈魂（une âme）〉に伝達される、〈身体〉の諸能力のうち、彼女が重視する能力は〈質的〉な〈感覚〉でなしに、〈量的〉な〈感受性〉であった。それゆえ例の〈望〉むと〈願望〉はもはや〈身体〉の

〈感覚〉に基いて成る、〈願望（受動）〉という〈感情〉ではなくなる。もとより、生得（自然）的能力である、〈身体〉の〈感覚〉が筆者にいう「知る作用（認識）」の機序に従うと同様に、〈身体〉の〈感受性〉も〈魂（視床脳）〉に受容されるは確かであり、この能力に対する〈望〉むはこの部位の〈感じる〉〈能動〉能力の働きかけで、〈願望〉はその〈受動〉能力としてもたらされることになる。しかしてこの〈願望〉を〈感情（sentiment）〉と指摘するは、〈身体〉の〈感受性〉が〈魂（視床脳）〉にかかわって、そこで新たに生み出された能力になるからである。したがって彼女の場合、〈魂（視床脳）〉以外の〈身体〉で産出される能力として、たとえば〈身体〉と関連するとされる〈情動（émotion）〉のことならまだしも、〈感情〉を当てるは不可能であり、〈感情〉は〈魂（視床脳）〉で生じる能力になるといえるほか、この部位が〈身体〉の〈感受性〉をはじめとする、何らかの対象を受け取らずに、突然〈感じる（sentir）〉すなわち〈望〉むを働かせては〈願望〉をもたらすなどはない。むしろ、〈身体〉の〈感覚〉さえ〈魂（視床脳）〉に受容されるにしろ、この〈感覚〉による〈感情〉は〈質〉に関した能力にしかなり得ぬし、〈身体〉の〈感覚〉や〈感受性〉に発する各〈感情〉は〈魂（視床脳）〉の〈能動〉能力（ressentir）を同時に働きかけさすことはないかと断じおく。

さらに一に、何ゆえ〈身体〉の〈感受性〉なのかである。筆者はこの答えを『秘蹟の理論』の冒頭文章で知ることができる。形容詞節中の語句を主語動詞の順に、要は〈行動、運動、挙動〉は〈生得的に魂にかかわる〉に並び換えることで、主語たる語句は当然〈身体〉の各動きを示唆させようが、それでも各動きをして、たとえば心臓や脳（身体）を機能せしめる、〈生得的〉かつ不断（日常）の〈運動〉だけをさすのではなかった。ヴェーユに語らせる〈行動、運動、挙動〉は〈生得的〉かつ不断の〈運動〉に、いわばさらなる負荷をかけずにいない動きであった。つまりヴェーユが〈運動は量である〉と述べたは、〈生得的〉かつ不断の〈運動〉すら〈量〉とみなされるにしても、それだけではない〈量〉が加えられていたことを証す以外にない。例の女工体験をはじめとした〈運動〉は何より〈身体〉を動かさざるを得なくするのであれば、彼女の〈身体〉に〈運動〉そのものの中味となろう〈能動〉能力〈感じる（ressentir）〉がたえず伴われ、その〈受動〉能力〈感受性〉を生じさせるにちがいない。だから〈感受



性〉は〈運動〉自体であり、〈量〉であるといわねばならなくなる。〈量〉はそのうえ〈生得的〉かつ不断の〈運動〉下の彼女（人間）にとってさえ、〈妨害〉を原因にしてもたらされるとみえるからして、「〈感受性〉はすでに〈量〉や〈妨害〉そのものを意味させる能力」<sup>44</sup>と記したは間違いのないし、当然〈妨害〉に発する〈量〉は〈身体〉から〈魂（視床脳）〉に、デカルト的にいえば〈神経〉や〈血液（血管）〉を通して伝えられる。それゆえ〈生得的〉かつ不断の〈運動〉に増加させずにいないとみる、彼女のいう〈行動、運動、挙動〉すなわち〈身体〉の〈感受性〉が後述するように、〈魂（視床脳）〉を含んでいう「〈脳〉全体をさす」〈魂にかかわる〉と語られる以上、ここに彼女にいう〈身体と魂の関係〉（もっぱら身体から魂への求心的関係）での〈心身合一〉が成ると証明し得るばかりか、この〈行動、運動、挙動〉なしに、要は〈妨害〉を起因にした〈量〉たる、〈身体〉の〈感受性〉なしに、少なくとも〈魂（視床脳）〉にその〈感受性〉だけでなく、〈望〉むと〈願望〉や〈注意力〉が生み出されず、しかも彼女（人間）の「〈脳〉全体をさす〈魂〉」が「あの世界」である〈靈的な善の領域（真理の王国）〉に〈入〉れなくなるのだ。〈真理の王国〉に〈入〉る前の「〈脳〉全体をさす」「定」冠詞付きの〈魂〉の〈メカニズム〉は、〈（自然の）必然性のメカニズムは、自然のままの物質、植物、動物、諸民衆、（人間の）魂なる、あらゆるレベルに対し、メカニズム自身と同じ作用を存続させている〉<sup>45</sup>との彼女の指摘を待つまでもなく、すべての人間を服従させる〈必然性〉によるし、その引用文で読み取れるように、彼女（人間）の〈魂（l'âme）〉を含めた、〈この世界〉である〈他の領域〉に在るすべてが〈必然性〉にかかわることを明かしくる。

すると一に、筆者はヴェーユを襲った、かの〈頭痛〉すら、彼女だけにみられると受け取ってみては、彼女個人の〈必然性〉になると、あるいは先きの引用文から、〈この世界〉の〈必然性〉の一例に加えられると思えてならないが、いずれにしても、〈頭痛〉が〈必然性〉に与すると指摘し得るかを確かめておかねばなるまい。彼女は前記した、【靈的自叙伝】の引用文に、〈のちに頭痛がわたしのわずかな能力を麻痺させ、すぐにこの麻痺が決定的なものたり得ると思われたとき（から）、（数えて）10年間、わたしはその同じ確信（真理の王国に入り込めるとした確信）によって…注意力の努力をねばり強く続けることが

できた)と書き残す。「年譜」をこれに当てはめると、〈のちに頭痛が)とは14歳の〈絶望)の〈のちに)つまり15歳に生じはじめるし、〈すぐに(頭痛の)麻痺が決定的なもの)になるとは「年譜」による「頭痛の最初の激しい発作」をさすとみなせば、この〈決定的な)〈麻痺(発作)は15歳より〈すぐに)に相当するかはともかく、21歳の、「ラグビー(への参加)からの帰途に」起きたとされる。そこでその〈発作)を含め、〈わたしのわずかな能力を麻痺させる)〈頭痛)には何が起因するかを質す必要がある。「発作」に関する「ラグビー」に例を引いて、彼女がその観戦でなしに、それに加わっていたとなると、〈頭痛)での〈麻痺(発作)は当然、〈身体)を〈激し)く動かさざるを得ない〈運動)に困ったにちがいない。だからここから、〈頭痛がわたしのわずかな能力を麻痺させ)た現実も同じように捉えることができる。筆者にとって彼女の控え目な表現にみえる〈わずかな能力)はいかなる能力であるかといえ、おそらく〈思惟(する)能力を示すであろうし、〈わずかな能力)の〈麻痺)はこの〈思惟(する)の逃亡)にかかわらせ得るとみるならば、〈頭痛(麻痺)すら〈身体)の〈生得的)かつ不断の〈運動)以外の、〈量的)な〈運動)すなわち〈身体)の〈感受性)を原因とさせずには済まされないのであろう。〈思惟(する)能力が〈麻痺(逃亡)したは〈頭痛)の直接因になるとすると、〈魂(l'âme)の破壊)に繋らせかねないから、〈頭痛)は「〈脳)全体をさす〈魂)」で生じると捉えられ、そうさせる彼女の、〈妨害)を起因にした、〈身体)の〈魂(l'âme)への〈量)たる〈運動(感受性)の影響なしには〈頭痛)ももたらされないことになる。また〈思惟(する)の逃亡)の直接因を〈頭痛)にみずとも、〈頭痛)は誰にあってさえ、〈身体)の〈生得的)かつ不断の〈運動)を越えたところに生じる〈妨害)以外の何ものでもないならば、〈妨害)を作り出すは〈身体)から〈魂(l'âme)まで亘り伝えられた、〈量的)な〈感受性)を除かないと断じ得よう。とまれ〈頭痛)を生じさす一因を少なからず〈感受性)にみてかまわぬは、その〈頭痛)要は〈感受性)も〈魂(l'âme)すなわち〈脳)を含めた〈身体)の、〈生得的)かつ不断の〈量的)な〈運動)という〈必然性)に発するのだから、こと彼女は自ら、この〈必然性)たる、〈頭痛)をも惹起させよう〈感受性)に身を委ね従うことを、〈天命がわたしの感受性に刻み込んだ)とされる〈天命)として受け取らざるを得なくなったわけである。彼

女が〈身体〉の〈感受性〉をして、彼女（人間）の〈必然性〉といわせしむるならば、こうした〈必然性〉も彼女（人間）にのしかかる、いわゆる《不幸》の一をかたちづくると指摘して間違いないはずである。何せ彼女の、14歳や15歳にはじまる〈絶望〉や〈頭痛〉さえ、捉えようによっては〈不幸〉といえないことはないばかりか、各〈不幸〉の因は〈身体〉の〈感受性〉にあったとみなし得るからである。すると彼女自身の〈絶望〉や〈頭痛〉という〈不幸〉ではあるが、しかしこの14歳15歳の〈不幸〉の前兆なくば、筆者には〈この世界（他の領域）〉での、彼女自ら女工となって労働者の群れに飛び込んで彼ら「他者」の〈不幸〉を共有することができなかつたであろうと読み取らせる。だから、彼女にいう〈不幸〉は何も工場体験からはじまるわけではなくるとともに、〈絶望〉や〈頭痛〉なる〈不幸〉なくして、ボーヴォワールがヴェーユとの出会いを回顧し記したように、〈大飢饉が中国を襲った〉〈報を聞いて、彼女は嗚咽した〉などは不可能であったといわねばなるまい。彼女はまた、〈わたしは世界全体に達し闘い得る勇気を羨んでいた〉と述べた。この引用文は長命であった彼女がヴェーユの諸作品に目を通すなかで書かれたといえるならば、筆者が理解するヴェーユの思想に近くなるし、納得できるように思われる。なぜなら〈世界全体〉に対し〈闘い (battre) 得る勇気 (un cœur)〉と記されるは、彼女がヴェーユの思想を見抜いたことを、そのうえ筆者の理解をも証してくれるからである。ただ〈世界全体〉とはボーヴォワールの思想がこの語に入り込むと、間違いなく〈この世界〉をさすほかないからして、彼女がこれを押し通したのでは、当時のヴェーユに少しでもみられよう「あの世界」が問えないだけに、〈世界全体〉をいかに理解したかが疑問となるところではあるが。とまれボーヴォワールの上記文章が筆者の理解となるは次の場合にかざられよう。筆者は〈闘う (battre)〉を〈行動〉と、しかも〈勇気 (un cœur)〉に支えられた〈行動〉と読むし、〈行動〉には「静の行動」や「動の行動」があると指摘しておいた。一方〈勇気〉と訳した〈un cœur〉には「心情」の語意もあり、筆者は〈勇気〉と「心情」を同義とみなす（〈闘う〉が関係するゆえに、訳を〈勇気〉としたにすぎない）。するとヴェーユが〈絶望〉や〈頭痛〉を押し、後日「労働者の群れに飛び込んで、彼らの〈不幸〉を共有しよう」とする〈行動〉とその〈勇気〉は「心情」に基づいており、「心情」は〈絶望〉や〈頭

痛)と同じく、〈感情〉でかたちづくられる能力でなければならなかった。しからば〈感情〉はヴェーユにあっていかにして成ったのか。〈感情〉を成り立たせる〈行動〉とその〈勇氣〉は〈身体〉を動かしている「動の行動」にあった。少なくとも〈理性(意志)〉を駆使させ獲得された〈観念(思惟)〉という「静の行動」で産出されるのではなかった(「静の行動」は〈感情〉に伴われたり、〈感情〉自体である〈不幸〉を感じ取らせたりすることはない)。「動の行動」といえば、これは〈わたしの感受性に刻み込まれた〈天命〉としての〈感受性〉であるほかなかった。〈身体〉の〈運動〉そのものである〈感受性〉がこの〈身体〉に発し〈cœur(心)〉要は彼女にいう〈魂(視床脳)〉に伝えられ、「心(魂)」の〈能動的(ressentir(感じる))の働きを受けては、「心(魂)」の「(心)情」すなわち〈感情〉を、たとえば〈絶望〉〈頭痛〉〈願望〉〈注意力〉や〈歓喜〉を生じさせもするのであった。〈感受性〉による〈感情〉はまた〈わたし〉の〈生得的)かつ不断の〈運動〉という〈必然性〉に従った〈闘う〉〈行動〉にあってこそ、〈勇氣(心情)〉にすらかかわりあえてもたらされるのだから、ヴェーユの生き方にとっては、この〈必然性〉に合致させられた〈行動〉に依拠せざるを得なくなる(後述の通り、かかる〈行動(運動)〉がいかに〈激しさ〉を増そうともだ)。そこで筆者は、〈行動(動の行動)〉のほとんどが彼女の生き方そのものになるし、彼女がこれを「静の行動」で諸作品にして書き留めてはわたしたち読者に知らしめども、この14歳ないしは15歳からの生き方は、自らの生きた哲学と「静の行動」による思想とが一貫性や整合性を有するとみられる際の、そのはじまりであるということができるとだ。こうなると、〈理性〉を称揚して止まなかったボーヴォワールにあって、〈行動(動の行動)〉(で生じ)たる〈感受性〉や〈感情〉は見向きもされないとすれば、〈un cœur〉の〈勇氣〉の訳語にはいかなる意味が込められるかを見定めるは不可能でしかならう。

そして一に、ヴェーユがまた、〈地球上の不幸がわたしに取り付いている〉<sup>93</sup>と述べた際に、〈地球上の不幸〉とは当然〈この世界(他の領域)〉の〈不幸〉と換言できるし、その〈不幸〉をして彼女自らに生じた〈不幸(絶望や頭痛)〉以外の、筆者の前記した語「何らかの対象」に含ませるほかないどころか、〈この世界〉をも〈必然性〉として捉えねばならない「対象」になるにせよ(〈絶望〉の「対象」はただし、〈この世界〉の〈不幸〉にでなしに、〈天才〉たる〈兄

にあった)、彼女が〈この世界〉の〈不幸〉という「対象」に対してさえ、例の『靈的自叙伝』や『秘蹟の理論』の各引用文に記す〈望〉むと、わけても〈願望〉は通用させられるのか、これらの能力が役立つとみるならば、どう〈この世界〉の〈不幸〉と結びつけられるかに答えおこななくてはなるまい。〈望〉む(désirer)と〈願望(désir)〉は少なからず、彼女が〈頭痛(不幸)〉に、さらに〈この世界〉の〈不幸〉に各襲われたときに、たとえば「痛みが止まれ」や「苦しみが去れ」と望み願う、〈能動〉と〈受動〉の能力ではない。むしろ当の能力は「〈脳〉全体をさす」〈魂(l'âme)〉中の〈魂(une âme)〉とみなした「視床脳」で生じたが、それでも当の能力がその部位で突然もたらされたというよりか、〈身体〉の能力〈感受性〉とかかかって生み出されていたことに留意すべきであった。だから筆者が彼女に「静の行動」で仕上げ語られよう「認識論」を筆者なりに組み立て完成させるにあって、一方で彼女が〈この世界〉の〈不幸〉と無関係に、〈真理を望んだり〉〈願望〉したりできないとみたことを踏まえおくとともに、〈望〉むと〈願望〉がこれまで質してきた〈身体〉や〈魂(une âme)〉での各〈感受性〉のほかの能力たり得るとして、筆者のいう「認識論」に組み入れるはもとより、他方で彼女が〈真理〉に、すなわち〈絶対的な善〉に〈真直ぐに向けられた願望のみが魂(l'âme)にそれ以前にはなかったような善をいくつか生じさせることができる〉と断じた以上、〈この世界(他の領域)〉の、〈l'âme〉と記された〈魂〉のなかでの〈感受性〉を「あの世界(靈的な善の領域)」の〈感受性以上〉(の能力)にさせ得ると同様に、〈この世界〉での〈望〉むと〈願望〉(または〈注意力〉や〈世界(自然)の美〉に接しての〈歓喜〉)が「あの世界」に繋げられる能力になると指摘できては、その一にいかなる結語が与えられるかを、上記の作品の各引用文でいまだ触れていない語句などを参照しつつ、以下にまとめておく必要がある。

〈魂〉を二つに捉えたは、ヴェーユが筆者にいわせる「〈脳〉全体をさす〈魂〉」を〈l'âme〉と、同じく「視床脳」をさす〈魂〉を〈une âme〉と表現し使い分けていたとみるからである。〈l'âme〉は、〈une âme〉すなわち〈身体〉の〈感覚〉や〈感受性〉をそれぞれ受容し、各〈感情〉をも産出させる機能を有した「視床脳」たる部位と、この各能力を受容しては、〈理解〉したり、〈意志〉したりなどする働きかけから〈理解〉や〈意志〉などを生み出し得る、要はデカ

ルト的にいって〈思惟する〉とその〈思惟〉を可能にする〈精神 (esprit)〉、筆者にいう「大脳皮質」たる部位とを主に取り込んで構成されていた。彼女が〈une âme〉をも強調するは、そこが〈身体〉の能力、なかでも〈感受性〉と関係する部位であったことにある。これは〈真理の探求〉で〈思惟する原理〉の〈精神 (esprit)〉を前面に押し出したデカルトとは異なり、彼女にあっては、この〈精神〉の部位ばかりか、彼以前から慣習的に用いられたとされる、〈栄養を取り、成長〉する〈原理〉に、つまり〈身体〉にかかわる部位を含めた〈l'âme〉として成ることを示唆させる（もちろんデカルトが〈l'âme〉に基づいた、筆者のいう「日常的用法」の「認識論」すら用意していたとみえるはこの〈原理〉に対応させたことになるのだが）。彼女の場合、〈この世界〉や「あの世界」での〈魂〉はいずれも〈l'âme〉が使用されども、〈この世界〉では自然的な〈魂〉の、「あの世界」では超自然的な〈魂〉の謂でしかなくなろう。

「自然的な魂 (l'âme)」は、すでに記した、〈もっとも大きくて純粋な歓喜すらわたしの感受性に重なり得る〉や〈悲しみや歓喜は注意力の努力を払って生じる〉とされる、ヴェーユの引用文<sup>90</sup>で知るように、〈感受性〉〈悲しみや歓喜〉と〈注意力〉の諸能力を生み出すところとみることが出来る。だが筆者が〈注意力〉を除いた諸能力の出所こそ〈une âme〉にあると指摘していたにもかかわらず、〈l'âme〉と記すは、彼女が自らの〈不幸 (絶望や頭痛)〉のほか、〈この時代〉と〈過去のすべての世紀〉という、上記に引用した文章に続く語句から窺える〈この世界〉の〈悲しみ (不幸)〉を〈感じる (ressentir)〉ことで、〈une âme〉なる一部位が「〈脳〉全体をさす」「自然的な」〈l'âme〉に取って代わられると同時に、〈わたし (彼女)〉がこの〈l'âme〉を自らにかたちづくらねば、〈l'âme〉は「超自然的な魂 (l'âme)」に移行できなくなろうし、ましてや「あの世界 (霊的な善の領域)」での〈もっとも大きくて純粋な歓喜〉の獲得へと繋らせることさえ不可能であろうからである。彼女がこうした〈純粋な歓喜すらわたしの感受性に重なり得る〉と語ったことは、〈歓喜〉が〈この世界〉や「あの世界」にみられることを、しかも〈わたしの感受性〉(あるいは〈注意力〉)にかかわらずにいないことを明らかにする。むろん〈悲しみ (不幸)〉の方は〈この世界〉にあって、〈感じる (ressentir)〉を働かせ生じる〈感情 (受動)〉能力である。〈歓喜〉もまた〈感情〉能力になろうが、しかし「あの世界」では〈こ

の世界〉にいう〈感情〉でないことだけは確かであろうとっておく。

それでもヴェーユの述べる〈わたしの感受性〉とは何かである。この〈感受性〉は〈わたしの〉と記されたがゆえに、「自然的な魂 (l'âme)」中の一部位 (une âme) で、〈この世界〉なる「対象」を〈感じる (sentir)〉〈能動〉能力が作用し、〈une âme〉に生み出される〈受動〉能力であった。かつ〈この世界〉なる「対象」が彼女にとって、〈悲しみ (不幸) や歓喜〉として受け取られるならば、〈悲しみ (不幸) や歓喜〉はその〈感受性〉にさらに〈感じる (ressentir)〉の〈能動〉能力を働かして、こうした〈受動〉能力〈感情〉と呼ばれるほかなくなるにちがいなかろう。だから (une âme) での〈感受性〉なしに、たとえば (l'âme) に影響せずにはない、〈この世界〉の〈歓喜〉はむろんのこと、「あの世界」の〈純粋な歓喜〉も見出せはしないことになる。

ところでヴェーユは、〈悲しみ (不幸) や歓喜〉には〈注意力〉が欠かせないとも記す。すなわち〈悲しみや歓喜は注意力の努力を払って生じる〉と。しかし〈注意力〉が彼女に〈魂の、自然的な部分と超自然的な部分との交差点にある〉<sup>84</sup>とみなされる一方で、〈魂の方向づけであって、その状態ではない〉<sup>85</sup>と語られるならば、およそ〈状態 (様子)〉を示さざるを得ない〈悲しみや歓喜〉を〈生じ〉させはしないであろうと読むことができる。要するに〈注意力がおそらく努力のなかではもっとも高級な努力である〉<sup>86</sup>は筆者のみるところ、〈悲しみや歓喜〉を「あの世界」へと〈方向づけ〉ども、〈悲しみや歓喜〉自体の発生にかかわらないことにある。だから〈悲しみや歓喜〉に〈方向づけ〉なる〈注意力 (努力)〉を課すことでの〈生じる (venir)〉とは〈悲しみや歓喜〉が〈注意力 (努力)〉の「対象」として「現われる」謂でしかなくなる。そして筆者は以上から整理するに、あの〈身体〉の〈感受性〉が〈une âme〉に受容され、そこで〈身体〉の〈感受性〉のままに、あるいは〈une âme〉の〈感受性〉のままに、したがって〈悲しみや歓喜〉の各〈感情〉にならずに、「〈脳〉全体をさす」「自然的な魂 (l'âme)」に影響を及ぼしては、この (l'âme) の一部位たる〈精神 (esprit)〉の〈思惟〉を〈逃亡〉や〈空無 (真空)〉にさせようほか、〈une âme〉の〈感受性〉からときに生み出される〈感情 (悲しみや歓喜)〉を取り込んで「超自然的な魂 (l'âme)」へと〈方向づけ〉た〈注意力〉が例の〈知的注意力〉を示すかぎり、〈精神 (esprit)〉の一部位をも含んでいう、「自然的な」

〈魂 (l'âme) 自身の中身すべてを空無 (真空) にする〉<sup>88</sup>と語られたことをもって、「あの世界」への参入条件であるといわねばならなくなる (実は次の段落以降に掲げる〈願望〉もそうなのである)。

加えてヴェーユが〈注意力の努力がみられるとき、願望が真にある〉<sup>89</sup>という〈願望〉とは何かである。〈注意力〉や〈願望〉はこの引用文では〈この世界〉での「自然的な魂 (l'âme)」としての各能力をさすといえるし、また〈注意力は願望に結びつく〉<sup>90</sup>を参考にしては、〈注意力〉と〈願望〉はほぼ等しくなる能力と理解されども、さらに彼女に、〈注意力のもっとも高い部分だけが神と接触する〉<sup>91</sup>や〈神に方向づけられた願望が魂 (l'âme) を上昇させ得る、唯一の能力である〉<sup>92</sup>と語らせることでは、〈注意力〉と〈願望〉はそれぞれ「あの世界」の、〈神と接触する〉〈注意力〉であり、〈神に方向づけられた願望〉なのであって、すでに〈この世界〉での「自然的な魂 (l'âme)」の各能力でなくなるのだ。それでもここから、〈注意力〉と〈願望〉が〈この世界〉や「あの世界」で各もたらされるとみることが明らかになるし、そのうえ「あの世界」での〈注意力〉と〈願望〉は〈この世界〉のおのおのと無関係に、「あの世界」で突如生み出されるのではなく、〈この世界〉の〈注意力〉と〈願望〉に各繋つてあることが確かめられねばなるまい。彼女は〈神と接触する〉「超自然的な魂 (l'âme)」の〈注意力〉を、たんに〈注意力〉と書き続けてきた感のある、〈この世界〉での〈知的注意力 (attention intellectuelle)〉<sup>93</sup>でなしに、〈創造的注意力 (attention créatrice)〉<sup>94</sup>や〈直観的注意力 (attention intuitive)〉<sup>95</sup>と呼ぶと同時に、「あの世界」で生じる〈願望〉も〈人間が真理をさらに理解するようになりたいという願望だけをもって注意力の努力を果たす〉<sup>96</sup>とみていたからして、かの14歳時を振り返ってさえ、〈恩寵と願望との間に関係がみられると考へ〉たと、さらに〈願望がそれ自身によって、あらゆる形相状の、靈的な善の領域で効力を有することを確信していた〉と記し得たのである。

それでは〈願望〉は〈この世界 (他の領域)〉で〈真理をさらに理解するようになりたいという〉一種の〈方向づけ〉を示唆させる点で〈注意力 (知的注意力)〉と同じに捉えられるといえるにせよ、〈願望〉と〈注意力〉はいずれも〈感情〉の一能力とみてよいのかである。〈願望〉はむろん〈感情〉能力であろうが、〈注意力〉は〈知的〉と表現されるかぎり、〈思惟〉を発揮する〈理性〉(知



性)を、要は〈精神 (esprit)〉を出所にしており、〈une âme〉の能力ではないのだから、〈感情〉能力と断じてはならないし、ヴェーユに〈願望があるためには、楽しみや歓喜がなければならぬ〉<sup>40</sup>とも述べられるかぎり、この〈楽しみや歓喜〉に〈願望〉以外での〈注意力〉をあえて〈感情〉能力として宛がう必要はないと、つまり〈楽しみや歓喜〉に関する〈願望〉は〈注意力〉と無関係に、〈願望〉自身で〈靈的な善の領域〉に参入したうえでの〈神 (真理)〉に方向づけられることができると読み取れるからである。こうして「自然的な魂」の〈感受性〉(あるいはそこに〈身体〉で生じたままの〈感受性〉)が、また〈楽しみや歓喜〉などの〈感情〉能力に付随し生まれるとみる〈願望〉が、そしてかかる〈感情〉能力を取り込むといえる〈注意力〉がそれぞれ、「超自然的な魂」に移行される「あの世界 (靈的な善の領域)」で〈感受性以上〉に、〈純粋な願望〉に、〈創造的注意力〉や〈直観的注意力〉になるわけである。

しかるに筆者にとって、〈感受性〉のことはともかくも、今質している〈願望〉や〈注意力〉が「あの世界」に参入する各能力であることを既出引用文にて再度確認し、そこから浮上すると思える問題に答えなければならなくなる。〈ただ真理を望んだり、たえず真理に達するための、注意力の努力をなしたりするならば、いかなる人間でも…真理の王国に入り込める〉がその引用文である。ヴェーユは〈望〉む (〈能動〉能力とその〈受動〉能力〈願望〉) や〈注意力〉のそれぞれで〈真理の王国に入り込める〉と記したから、〈望〉む (と〈願望〉) や〈注意力〉はその〈有効〉な、「自然的な魂」の各能力であるし、この各能力なくば〈真理の王国 (靈的な善の領域)〉にかかわれないがゆえに、「あの世界」での「超自然的な魂」をさえかたちづけないことを証しする。しかしながら筆者には同時に、これも既出語句で〈感情〉能力のほかない〈悲しみや歓喜〉に、とりわけ〈悲しみ〉に対して、彼女は〈願望〉をではなく、〈注意力〉を注がねばならぬと主張するようにみえてくる。すなわち彼女は〈悲しみ〉を〈願望〉せよと一言も語ってはいないと、そればかりか、〈悲しみ (不幸)〉と〈歓喜 (幸福)〉のいずれをも取り込める能力として、必ず〈注意力〉を用いているということである。たとえば彼女に、〈不幸な人に注意する能力は非常にまれで、困難なものになる〉<sup>41</sup>といわせるがごとくである。

だから〈注意力〉と〈願望〉にあって、ヴェーユはなかでも〈願望〉をいか

にみようとしていたかがここに問われる。要はこれが筆者に「浮上すると思える問題」になる。「自然的な魂」の〈注意力〉と〈願望〉はそれぞれ、前者が〈悲しみ（不幸）や歓喜〉なる各〈感情〉能力を取り込んだり、〈真理に達〉せんとしたりすることで、後者が〈楽しみや歓喜〉なる各〈感情〉能力に付随したり、〈真理を望んだり〉することで生じる能力であった。そこには〈悲しみ（不幸）〉を〈願望〉するとした表記はない。だからマゾ的にみられることもない。だが彼女が自らの〈絶望〉や〈頭痛〉を、さらに〈この世界〉からの、〈不幸な人〉の〈悲しみ（不幸）〉を〈願望〉するといったとするならば〈頭痛〉に対してはとくに〈注意力〉が注がれるという、その〈願望〉は何を示唆させるかを問う必要があるというわけだ。彼女が自らの〈感受性〉に従わせる「動の行動」と〈理性（知性）〉に委ねられる「静の行動」で、〈絶望〉や〈頭痛〉たる各〈感情〉と〈この世界〉からの〈不幸（感情）〉に現に直面し、〈感受性〉や各〈感情〉が〈自然（世界）の必然性〉によると理解できたにせよ、そこにとどまるだけでは、〈注意力〉の、少なくとも〈願望〉の各語を何度も書き残す必要はなかったはずである。だが実際〈願望〉の語を持ち出すは、〈願望〉とは〈不幸〉や〈必然性〉の、かの〈歓喜〉の因が、あるいはかかる〈真理〉がどこからくるかを聞き出したいとする、彼女の願いや望み以外をさすのでないし、このためには〈不幸〉や〈必然性〉などの受け入れを可能にする「動の行動」が彼女（人間）の生に課せられねばならなくなる。つまり〈願望〉が〈絶望〉や〈不幸〉を受け入れてはじめて生じるは、その各〈感情〉の因を〈真理〉として求め尋ねさせることなのである。別言すると〈絶望〉や〈不幸〉などの受け入れを通して、〈純粋な歓喜〉への到達を促すのが〈願望〉であるということになる。だから〈この世界〉に〈絶望〉などしたといえども、その受容を拒んだ、例の実存主義者たちと相違させて、彼女を捉えておかねばならぬのだ。キリスト教実存主義者キェルケゴールやマルセルはともかくも、彼女にあって「どこから」はむしろ、〈純粋な歓喜〉の出所たる〈真理の王国（靈的な善の領域）〉を示すとともに、〈真理〉を聞き出したい、〈魂（l'âme）〉でつくられた願望<sup>44</sup>下の彼女がこの〈真理の王国〉に住まう〈神〉に現実に出会っては〈この世界〉の〈必然性〉を身をもって確認し得たばかりか、彼女独自の哲学をさえ確固たるものになし得たといえるのである。しかして「自然的な能力」である

〈願望〉の〈つぐられ〉方に関して繰返しおくと、それは何より〈魂 (une âme)〉に受容された〈魂〉の〈感受性〉に〈une âme〉の〈能動〉能力〈感じる (ressentir)〉が働きかけ、その〈受動〉能力〈絶望や不幸〉なる〈感情〉能力を生み出す一方で、それに取って代えられて働きかけるのが〈能動〉能力〈望〉むであり、そこから生じるのが〈受動〉能力〈願望 (感情)〉であるとされるのであって、〈願望〉はさらに「〈脳〉全体をさす」「自然的な魂 (l'âme)」に広げられ、「超自然的な魂 (l'âme)」をも彼女にもたらず、その当の〈force (能力)〉になるということである(したがってすぐにでも「自然的な魂」内での〈une âme〉の〈l'âme〉への、またこの〈l'âme〉の「超自然的な魂 (l'âme)」への移行はいかにして可能になったかに答えおくべきだが、これは以下の諸問題を片付けたあとでみることにする)。

【**霊的自叙伝**】や【**秘蹟の理論**】から取り出した各引用文中の〈注意力〉や〈望〉むと〈願望〉の使用に触れおくと、両引用文に見出せるのが〈願望〉の語であり、【**秘蹟の理論**】のそれには〈注意力〉や〈望〉むの各語のないことが、この点で「なかでも」と前記し留意を促した通り、二引用文にあっては〈願望〉の、要は〈理性 (知性)〉にかかわる〈注意力 (知的注意力)〉よりも〈感情〉の語を多用することが分かる。しかれどもヴェーユは〈願望〉であれ、〈注意力〉であれ、このいずれもが〈真理の王国 (霊的な善の領域)〉へのいわば橋わたしの能力であり、〈注意力は願望に結びつく〉(要は筆者には〈注意力〉が〈願望〉を「取り込む」とみえた)ともいうのだから、【**秘蹟の理論**】の引用文中の「自然的能力」と捉えられる〈願望〉の語の箇所を〈注意力〉の語に置換させるも許されるやも知れぬと読むことができる。

〈注意力〉が「自然的な魂 (l'âme)」中の一部位たる〈精神 (esprit)〉を出所とする点で、他の部位〈une âme〉に生み出される〈願望〉と異なれど、一方で〈注意力〉は〈願望〉を「取り込む」とみた以上は、両能力を等しいといわずにおれないが、しかしヴェーユはまた〈真理の王国 (霊的な善の領域)〉にかかわらない〈願望〉があると指摘する。だからこの場合、〈注意力は願望に結びつく〉ことが不可能になろう。かかる〈願望〉のことを、【**霊的自叙伝**】に〈この世界〉をさす〈他の領域では効力のない〉それとして、【**秘蹟の理論**】に〈そうならない願望〉、〈こうした願望は魂 (l'âme) に働きかけない〉や〈不

完全な善への願望)として表現させた。要するに、〈霊的な善の領域(あの世界)〉の〈願望〉になり得ない、〈他の領域(この世界)〉での〈願望〉は、〈この世界〉に終始するそれだから、〈この世界〉ではむろんのこと、「あの世界」ですら〈効力のない〉ことを、〈願望〉が〈運動(身体的感受性)〉によって〈身体を経由させられ〉て生じるのに、〈そうならない願望〉は、別言すると〈運動〉たる〈必然性〉に従われないで成る〈願望〉は、ポーヴォワールが『娘時代』に記した〈幻影(mirage)〉や〈夢想(illusion)〉のように、〈幻想(fantôme)〉のごとく存するにちがいないことを、〈こうした願望は魂(l'âme)に働きかけない〉とは、〈魂(l'âme)〉がそのなかの〈精神(esprit)〉部位をさすにあっても、そこの〈注意力(知的注意力)〉が〈願望〉を「取り込」まないことを、そして〈絶望〉〈不幸〉と〈歓喜〉などを受容させずにもたらされる〈願望〉は、これらの〈感情〉に「取って代えられ」ないし「付随し」ないがために、〈不完全な善への願望〉にしかならないことをそれぞれにて意味させると捉えられる。

また上記した〈絶望〉〈不幸〉と〈歓喜〉さらに〈願望〉という各〈感情〉は、「自然的な魂(l'âme)」の一部位〈une âme〉が〈身体〉の〈感覚〉や〈感受性〉を各受け入れないで生み出される、当の能力たり得るとみてよいのか、あるいはヴェーユが自らの〈絶望〉や〈頭痛〉以外に、〈この世界〉での「他者(労働者)」の〈不幸〉以外に、何をもって〈望んだり〉、〈願望〉できたりするといったのかも問題になる。いずれにも否と答えるほかあるまい。なぜなら彼女はもとより〈une âme〉に受容される〈身体〉の〈感覚〉から〈感情〉が生じることをどうでもよいとして捨ておく(何ゆえかは後段に譲る)が、しかし〈身体〉の〈感受性〉なしに〈une âme〉が〈能動〉能力たる〈感じる(ressentir)〉をして〈この世界〉の〈不幸〉などの〈感情〉を、さらにこの〈感情〉に「取って代えられる」、例の〈願望(感情)〉を生じさせはしないし、およそ「何を」なる、いわば目的(対象)を欠いて独自に〈願望〉をもたらすこともないとみるからである。要は自らのことや〈この世界〉に対する「何を」という「対象(諸感情)」が欠如されては、〈望むと願望〉は無用の能力になりかねないのだ。だが「対象(諸感情)」に基づいて成る〈望むと願望〉といえども、〈身体〉の〈感覚〉や〈感受性〉が「感覚諸器官」を通して「自然的な魂(l'âme)」

の〈une âme〉に必ず伝えられるのであり、〈une âme〉にとって〈願望〉を生み出すためにも、〈願望〉より先きに受容させていなければならぬ、とりわけ〈身体〉の〈感受性〉（これも〈une âme〉の「対象」となる）なかりせば、諸〈感情〉も、ましてや〈望〉むと〈願望〉も生じてこないことにある。だから彼女はこの〈身体〉（の〈感受性〉）と〈魂（une âme）〉の「求心」的關係をもって、〈心身合一〉の根拠とするだけではなく、〈身体〉と〈魂（une âme）〉それぞれの、また〈une âme〉での〈不幸〉〈歓喜〉や〈願望〉なる各〈感情〉の、そして「〈脳〉全体をさす魂（l'âme）」のなかでの〈注意力（知的注意力）〉の、〈生得的〉かつ不断の〈運動〉を含めていう〈運動〉すら、彼女（人間）にあって〈必然性〉でしかないと思なしたのだ。筆者はこれを捉え、彼女独自の哲学を、〈身体〉の〈感受性〉を中心にした身体論哲学ということが出来る。

さてここで繰り返し確認すべきは、〈魂（une âme）〉で生じよう、ヴェーユにいう、肝要な諸〈感情〉は、誰もが〈身体〉の〈感覚〉に依拠し生まれるといえても、これによるとするだけでなしに、〈身体〉の〈感受性〉にかかわってもたらされることにあった<sup>99</sup>。〈魂（une âme）〉が〈身体〉の〈感覚〉を受容し、これに〈une âme〉の〈sentir（感覚に対しては感覚すると訳す）〉が働きかけると、〈une âme〉の〈感覚〉として産出されようが、その〈感覚〉は彼女にあって〈sensation〉であり、しかも「赤」は「赤」という〈質〉をあらわすとされるのだから、〈身体構造に妨害される）<sup>100</sup>ことのない能力となる。それはまた、「感覚諸器官」や〈魂（une âme）〉の〈生得的〉かつ不断の〈運動〉で、この〈必然性〉に従われるといえるにせよ、〈身体〉から〈魂（l'âme）〉全体に亘る〈感受性〉のような〈運動〉にはならず、〈魂（une âme）〉しか動かしはしないのが〈感覚〉の〈運動〉であるといわざるを得なくなる。しかれども〈une âme〉の〈量〉たる〈感受性〉の機序について後段で触れおくと同様に、例の「赤」なる、〈身体（視覚）〉で受け取る〈感覚〉（質）がいつもより広がりや度合いをもって〈une âme〉に受容されては、この〈感覚〉は〈質〉の〈量〉を、また〈身体〉の〈感覚〉をしていかに〈une âme〉に成立せしめたかはすでに上記した通りで、ここに繰り返しはしないが、さらにその〈une âme〉の〈感覚〉に〈再び感覚する（ressentir）〉を加えさせる働きかけがあるとみる場合、〈感

覚)がそこで〈感情〉をもたらしては、〈感覚〉による〈感情〉をあらわさず  
 にいないのであり、しかもこれらがときに〈感覚(質)〉のままとして、とき  
 に〈感覚(質の量)〉や〈感情〉として、「〈脳〉全体をさす魂(l'âme)」中の、  
 彼女にいう〈精神(esprit)〉部位に伝えられることでは、〈感覚〉がこれも筆  
 者にいう、デカルトの、〈精神(esprit)〉ではなく、〈l'âme〉を中核にした「日  
 常的用法」のように、〈思惟(する)〉の「対象」ともなることが可能であると  
 いえてくる。

こうした〈感覚〉に比べて、〈感受性〉は〈身体〉でも〈魂(une âme)〉でも、  
 〈生得的)かつ不断の〈運動〉に従われつつ、〈運動というものは量的である〉<sup>四</sup>  
 とした、その〈量〉をあらわすのであり、〈身体構造に妨害され)て生じる能  
 力であった。だから〈感受性〉は〈身体〉から〈une âme〉に伝わる「求心」  
 的關係において、〈運動(量)〉であり、〈妨害〉であるといえたわけである。  
 そこで〈感覚〉でも触れたごとくに、〈感受性)たる〈量〉が〈身体〉にさら  
 なる〈量〉を加えた「量の量」になるとみるならば、これを受容する〈une  
 âme〉にあつて、〈感受性)はときに、「量の量」のままに、要は〈une âme〉  
 の〈感じる(sentir)〉の働きかけを受けず、〈身体)の〈感受性(量の量)〉  
 のままに、「〈脳〉全体をさす魂(l'âme)」に伝達され、この一部位〈精神(esprit)〉  
 での〈思惟)を〈逃亡)〈空無(真空)〉にさせるであろう。また〈感受性(量  
 の量)〉がときに、〈une âme)の〈感受性(量)や(量の量)〉になるだけか、  
 このそれぞれに〈une âme)の〈能動)能力〈再び感じる(ressentir)〉が働  
 きかけ、このおかげでその〈受動)能力は〈絶望)〈頭痛)〈悲しみ(不幸)〉〈歓  
 喜)そして〈願望)という諸〈感情)として生み出されるであろう。〈感受性)  
 による諸〈感情)は、〈感覚)による〈感情)と同じ「認識(知る作用)」の機  
 序(しくみ)に従うが、それでも〈量的)なおかつ〈妨害)によって生じる点  
 で相違すると繰返しおく。「量の量」である、〈身体)の〈感受性)〈une  
 âme)の〈感受性)やその諸〈感情)もまた、筆者にすれば、ヴェーユをはじ  
 めとする人間の〈生得的)かつ不断の〈運動)たる〈必然性)以上の〈必然性)  
 にみえてこようし、この〈必然性)はそれゆえ、彼女にいう〈世界(自然)の  
 美)であるはむろんのこと、彼女(人間)がこれに接して〈歓喜(感情)〉し  
 得る以外、上記での〈絶望)以下を含む、何らかの〈不幸(感情)〉をあらわ

すに等しいといわざるを得なくなろう。別言するとあらゆる人間は〈生得的〉かつ不断の〈運動〉すなわち〈量〉なる〈感受性〉に基づく〈必然性〉を有するほか、あるいはそのもとにて、さらに〈この世界（他の領域）〉なる〈必然性〉すなわち〈世界（自然）の美〉だけでなく、〈この世界〉の〈不幸〉とたえず対峙させられていなければならないということである。

それでも〈身体〉の〈感受性〉が〈身体〉の〈運動〉すなわち〈量〉であるは認められども、何ゆえ「量の量」と表記されるのか。それは筆者にとって、自ら動く〈運動（量）〉だけでなく、〈この世界〉が〈必然性〉であることを、つまりヴェーユにとっても、自らの〈生得的〉かつ不断の〈運動（量）〉を含めた、〈この世界〉の〈必然性〉を背負うことを表現する以外にないからである。たとえば天変地異に見舞われたとき、人は不安や恐怖を覚えれば、不断の〈運動（量）〉にない〈運動（量）〉を知らずに課しているはずであり、いつもにも増して、〈身体〉の〈感受性〉を〈身体〉のみにとどまらず、「不安や恐怖」（諸〈感情〉）を生み出す〈魂（une âme）〉に伝えさせるし、当人はむろんのこと、「天変地異」を開きつけた人には、それを〈この世界〉の〈必然性〉と納得しなくとも（事実はそうなのだが）、少なからず感じ取っては、〈une âme〉に〈悲しみ（不幸）〉という〈感情〉があらわれることになる。〈世界（自然）の美〉に接し、〈歓喜（感情）〉がもたらされる、「認識」の機序も同様であろう。しかし〈この世界〉を〈必然性〉と捉えないでは、彼女のいう〈願望（感情）〉さえ生み出されないであろう。〈une âme〉に生じる〈悲しみ（不幸）〉〈歓喜〉〈願望〉の諸〈感情〉は、〈une âme〉の〈感受性〉に起因するのであり、〈une âme〉に受容されても、〈身体〉の〈感受性〉のままにある、この能力に原因することはない。なぜなら諸〈感情〉の出所は〈une âme〉にしか見当たらないからである。そのうえ〈une âme〉の〈感受性〉となったそれが諸〈感情〉を生じさせない場合は「量の量」たる〈運動〉として、またそれが諸〈感情〉を生み出す場合は「量の量」を含んだ諸〈感情〉の〈運動〉として、「〈脳〉全体をさす〈魂（l'âme）〉」にまで伝わらせずにおれなくする（ただし〈une âme〉は本来諸〈感情〉を産出すべき機能を有するとみえるからして、その〈感受性〉で終始あり続ける場合はほとんどなかろうし、彼女もこの場合を問うことはないように見受けられる）。

そこで問題は、諸〈感情〉がなぜ「〈脳〉全体をさす〈魂 (l'âme)〉」に伝わるのか、換言すると〈魂 (une âme)〉の諸〈感情〉が〈l'âme〉に伝えられるはどうか。ヴェーユは例の『秘蹟の理論』に〈願望の激しさと時間〉と書き加えていたが、筆者にとってこの語句こそまさに上記の問題に対する答えになるといえる。〈願望〉は〈une âme〉の諸〈感情〉の一であった。だからこの語句は彼女が〈願望〉の語に代表させていいつつも、〈願望〉ばかりでない、諸〈感情〉の〈激しさと時間〉であるとみておかねばなるまい。しかも諸〈感情〉の〈激しさと時間〉は実は諸〈感情〉をもたらし、〈une âme〉の〈感受性〉なる「量の量」に重ねられて等しくなった、別の表現なのである。換言するとこれは〈悲しみ (不幸)〉〈歓喜〉〈願望〉に繋げられる「量の量」が各成立させられた諸〈感情〉に〈激しさと時間〉として引き継がれたか、いい換えられたかする表現にすぎないということである。

諸〈感情〉と記したうちの〈願望〉は前述のように、ヴェーユ自身に生じた〈絶望〉〈頭痛 (苦しみ)〉や〈この世界〉からくる〈悲しみ (不幸)〉〈歓喜〉と相違させて捉えられた。つまり〈願望〉は諸〈感情〉の一であれ、上記した各〈感情〉に立って成る能力であった。〈絶望〉と〈頭痛 (苦しみ)〉が各〈激しさと時間〉を要していたのであれば、彼女の〈魂 (une âme)〉のなかで、〈絶望〉をして〈真理を望〉ませ得るはもとより、その〈願望〉(〈絶望〉の〈激しさと時間〉に「付随する」能力)をもって、〈une âme〉をば「〈脳〉全体をさす」「自然的な〈魂 (l'âme)〉」に広げさせ、あまつさえこの「自然的な〈魂 (l'âme)〉」を「超自然的な〈魂 (l'âme)〉」にして「あの世界 (靈的な善の領域)」に参入せしめ得るであろう。「超自然的な〈魂 (l'âme)〉」にあつて、彼女が『靈的自叙伝』中に、〈願望がそれ自身によって、あらゆる形相状の、靈的な善の領域で効力を有する〉と、『秘蹟の理論』中に、〈絶対的な善に真直ぐに向けられた願望のみが、魂にそれ以前にはなかったような善をいくつか生じさせることができる〉と書く通りなのである。一方〈頭痛 (苦しみ)〉は〈ラグビー〉を試みた後、10年以上も続いていたし、この間女工やスペイン戦争への参加などで〈この世界〉の〈悲しみ (不幸)〉を体験したがために、彼女がいかほどの〈不幸〉と〈頭痛〉の重ねあわされた〈激しさと時間〉に襲われたか知るべくもないと同時に、こうした〈激しさと時間〉が彼女に記すごとく、「自然的な〈魂



(l'âme))」の〈注意力(知的注意力)〉を呼び起こさないとも、かつこの〈注意力〉によって「あの世界」の「超自然的な〈魂(l'âme)〉」へと「自然的な〈魂(l'âme)〉」を移行させないともかぎらないといわねばなるまい。別言すると彼女は、自らの「自然的な〈魂(l'âme)〉」中の一部位〈une âme〉に生じさせ、そこでなおも〈激しさと時間〉を要して、他の一部位〈精神(esprit)〉に広がらせる諸〈感情〉わけても〈願望〉により、また他の一部位に〈願望〉を「取り込む」〈注意力(知的注意力)〉により、それぞれ〈絶望〉や〈頭痛〉に、そして〈この世界〉の〈不幸(感情)〉に取って代えられることでは、〈願望〉や〈注意力(知的注意力)〉も〈この世界(自然)〉の〈必然性〉(の〈メカニズム〉)に従った各能力になるほかないし、このことはとどのつまり、彼女が自らの〈絶望〉や〈頭痛〉と〈この世界〉の〈不幸〉から各能力(〈願望〉と〈注意力〉)を生み出されずにいないほどに、〈この世界(自然)〉のあらゆる〈必然性〉を背負い耐え忍ばなくてはならぬことを含意させる。これなくば、彼女の生き方すなわち哲学にならないのだ。「自然的な〈魂(l'âme)〉」での〈激しさ〉は「量の量」のいい換えとして、〈時間〉は〈ラグビー〉後の10年間の、あるいは14歳以降死に至るまでの長さとして捉えてよい。彼女はその都度、〈不幸〉や〈頭痛〉に対する〈願望〉や〈注意力の努力〉を可能にさせるところの、〈une âme〉の〈再び感じる(ressentir)〉を繰り返してでも注ぎ込まないではいられなかったとみえるだけに、〈願望〉や〈注意力の努力〉の各〈激しさと時間〉はいかばかりであったのか、およそ無限に思えるほどの頻度に達していたにちがいない(だが「あの世界」での「超自然的な〈魂(l'âme)〉」にとって、〈激しさ〉は見当たらないどころか、非時間であり、なおかつ非空間、非物質であるというまでもない)。

したがって、ヴェーユが諸〈感情〉を代表させて問うた感のある〈願望〉による、その〈激しさと時間〉をして、「〔脳〕全体をさす」「自然的な〈魂(l'âme)〉」から「超自然的な〈魂(l'âme)〉」にかかわらせ得ては、〈魂(l'âme)〉内のこの移行を〈願望の激しさと時間〉という〈運動〉にみても(次号でより言及する〈注意力〉も〈願望〉と同様な〈運動〉である)、〈運動〉は彼女の「自然的な〈魂(l'âme)〉」に何を強いたかについてまとめおく必要がある。これに当たり確認すべきは、「自然的な〈魂(l'âme)〉」に広まる諸〈感情〉とりわけ〈願

望)や、この〈願望〉を「取り込む」〈注意力〉なしに、〈l'âme〉は「超自然的な〈魂 (l'âme)〉になれないし、彼女 (人間) がなかでも、何ゆえ〈願望〉の導出に依存せずにおれないかは、〈この世界 (自然)〉が〈必然性〉であり、彼女 (人間) に〈世界 (自然) の美〉に接しての〈歓喜 (感情)〉よりか、〈絶望〉〈頭痛〉〈悲しみ〉を一言していうところの、〈不幸〉なる〈感情〉を惹起させざるを得ない世界であったということである。

[続]

註

- (1) Simone WEIL 《Pensées sans ordre concernant l'amour de Dieu》(Gallimard) 中の《Théorie des sacrements》P.P.135-137 (この『秘蹟の理論』は1943年にロンドンで執筆され、モーリス・シューマンに送られた、晩年の作品である)
- (2) Simone WEIL 《La pesanteur et la grâce》(Plon) (C'est le vide dans la sensibilité qui porte au-delà de la sensibilité. (感受性のなかの空無 (真空)こそ、感受性以上に運ぶのである)) P.33
- (3) 《LA BIBLE》(LES SOCIÉTÉS BIBLIQUES) 中の《JOB》6-9 (Qu'il plaise à Dieu de m'écraser. Qu'il étende sa main et qu'il m'achève!) P.432 (訳は『聖書』(日本聖書協会) P.703) による。また第16章6-17, 第21章17, 第34章5-6など参照)
- (4) 《LA BIBLE》(LES SOCIÉTÉS BIBLIQUES) 中の《MATTHIEU》27-46 (Mon Dieu, mon Dieu, pourquoi m'as-tu abandonné?) P.842 (訳は『聖書』(日本聖書協会) P.48) による)
- (5) Simone WEIL 《La pesanteur et la grâce》(Plon) (notre misère, nous ne la fabriquons pas) P.100
- (6) Simone WEIL 《La connaissance surnaturelle》(Gallimard) 中の《Cahiers d'Amérique》P.16
- (7) 拙論「シモーヌ・ヴェーユの哲学〔Ⅱ〕」(新潟大学大学院「欧米の言語・社会・文化」研究紀要, 第14号, 2008年) P.P.16-18参照。また拙論「シモーヌ・ヴェーユの哲学〔Ⅲ〕」(新潟大学言語文化研究, 第13号, 2008年) P.26, P.P.35-37参照。
- (8) Ibid.
- (9) Ibid.
- (10) 拙論「シモーヌ・ヴェーユの哲学〔Ⅲ〕」(新潟大学言語文化研究, 第13号, 2008年) P.33
- (11) 拙論「ヴェーユとマルクス③」(新潟大学言語文化研究, 第12号, 2007年) P.P.11-12註 (29)
- (12) 拙論「シモーヌ・ヴェーユの哲学〔Ⅲ〕」(新潟大学言語文化研究, 第13号, 2008年) P.34 註 (14) 参照
- (13) Simone WEIL 《Écrits de Londres et dernière lettres》(Gallimard) (Le malheur répandu sur la surface du globe terrestre m'obsède) P.199
- (14) 拙論「シモーヌ・ヴェーユの哲学〔Ⅲ〕」(新潟大学言語文化研究, 第13号, 2008年) P.34 註 (14) 参照
- (15) Simone WEIL 《Intuitions pré-chrétiennes》(Fayard) 中の《Decente de Dieu》(Cette attention intellectuelle est à l'intersection de la partie naturelle et de la partie surnaturelle de l'âme.) P.155 (この〈注意力〉は〈知的〉と形容される。〈知的注意力〉

- は〈注意力〉の一であり、「自然的な魂 (l'âme)」に、さらにいえばその〈精神 (esprit)〉たる部位に配置される能力と推察される。他の〈注意力〉は「超自然的な魂 (l'âme)」としてみられよう能力である。この名称については本稿か、拙著『シモーヌ・ヴェーユ研究』(白馬書房, 1980年) P.P.423-427参照)
- (16) Simone WEIL 《Pensées sans ordre concernant l'amour de Dieu》(Gallimard) 中の《L'amour de Dieu et le malheur》(l' amour est une orientation et non pas un état d'âme) P.104 (この引用文の主語は〈l'amour〉であり、本稿に記した〈注意力〉ではない。だが註 (15) の引用文に続く文章にて、筆者は〈知的注意力〉が「あの世界」と〈交差〉し、そこに参入しては、〈l'amour〉という、たとえばプラトンのエロース (神への愛) すなわち神へ〈方向づけ〉られた、本稿に述べる〈創造的注意力〉または〈直観的注意力〉に取って代えられると読み得るからである)
- (17) Simone WEIL 《Attente de Dieu》(Fayard) 中の《Reflexions sur le bon usage des études scolaires en vue de l'amour de Dieu》(L'attention est un effort, le plus grand des efforts peut-être.) P.92
- (18) Ibid., (l'âme se vide de tout contenu propre...) P.97
- (19) Ibid., (Il y a vraiment désir quand il y a effort d'attention.) P.88
- (20) Simone WEIL 《La pesanteur et la grâce》(Plon) (L'attention est liée au désir.) P.120
- (21) Simone WEIL 《Attente de Dieu》(Fayard) 中の《Reflexions sur le bon usage des études scolaires en vue de l'amour de Dieu》(Seule la partie la plus haute d'attention entre en contact avec Dieu.) P.85
- (22) Ibid., (le désir, orienté vers Dieu, est la seule force capable de faire monter l'âme) P.91
- (23) 本稿註 (15) 註欄参照
- (24) Simone WEIL 《Attente de Dieu》(Fayard) 中の《Formes de l'amour implicite de Dieu》P.136
- (25) Simone WEIL 《La condition ouvrière》(Gallimard) 中の《Condition première d'un travail non servile.》P.270
- (26) Simone WEIL 《Attente de Dieu》(Fayard) 中の《Reflexions sur le bon usage des études scolaires en vue de l'amour de Dieu》(un être humain accomplit un effort d'attention avec le seul désir de devenir plus apte à saisir la vérité.) P.87
- (27) Ibid., (Pour qu'il y ait désir, il faut qu'il y ait plaisir et joie.) P.91
- (28) Ibid., (La capacité de faire attention à un malheureux est chose très rare, très difficile.) P.96 (ちなみに、ここでいう〈能力 (capacité)〉は〈注意力 (attention)〉なる、「自然的な魂 (l'âme)」の能力と見て取れるが、本稿註 (22) 中の〈能力 (force)〉の方は〈神に方向づけられた願望 (désir, orienté vers Dieu)〉であってみれば、〈願望〉はすでに「あの世界」へ参入し得た、「超自然的な魂 (l'âme)」の能力でなければならず、彼女は両世界での〈能力〉の語をば区別して用いたことがこれで証明された)。
- (29) 拙論「シモーヌ・ヴェーユの哲学〔Ⅰ〕」(新潟大学人文学部人文科学研究, 第121輯, 2007年) P.P.57-58註 (33) (ここで〈願望〉の語は〈désir〉ではなく、〈vœux〉であるが、筆者は同意とみる。〈vœux〉もまた『霊的自叙伝』中に記される〈自然的諸能力〉の一に与する能力である) 参照
- (30) 拙論「シモーヌ・ヴェーユの哲学〔Ⅱ〕」(新潟大学大学院「欧米の言語・社会・文化」研究紀要, 第14号, 2008年) P.18参照。また拙論「シモーヌ・ヴェーユの哲学〔Ⅲ〕」(新潟大学言語文化研究, 第13号, 2008年) P.P.25-26, P.36参照
- (31) 拙論「ヴェーユ身体論」(新潟大学人文学部人文科学研究, 第120輯, 2007年) P.43註 (21)
- (32) 拙論「ヴェーユとマルクス③」(新潟大学言語文化研究, 第12号, 2007年) P.4註 (8)